遠山茂樹
今井清一
藤原彰
著

昭和史

〔新版〕

岩波新書

355

遠山茂樹
今井清一
藤原彰 著

昭和史

〔新版〕

岩波新書

355

とおやましげき
遠山茂樹

1914年東京に生まれる
1938年東京大学文学部国史学科卒業
専攻—日本近代政治史
現在—横浜市立大学教授
著書—「明治維新」(岩波全書)
「明治維新と現代」(岩波新書)

いまいせいいち
今井清一

1924年前橋市に生まれる
1945年東京大学法学部政治学科卒業
専攻—日本政治史
現在—横浜市立大学教授

ふじわらあきら
藤原　彰

1922年東京に生まれる
1949年東京大学文学部史学科卒業
専攻—日本近代史
現在—一橋大学助教授
著書—「軍事史」

昭和史〔新版〕　岩波新書(青版) 355

昭和34年8月31日　第1刷発行 ©
昭和46年10月20日　第18刷発行

著者　遠山茂樹
今井清一
藤原彰

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布1-385
印刷者　白井倉之助

発行所　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　精興社印刷・田中製本

はしがき

この書物は、昭和の歴史を、とくに一四年間の戦争の歴史に重点をおいて、とりあげている。この時期の歴史はくりかえし語られなければならない。そこには私たちのつきぬ思い出があり、忘れることのできない犠牲がはらわれている。戦争体験こそ、今日および明日、日本人が生きてゆくための叡智と力とをくみとることができる、尊い国民的遺産である。

初版のはしがきにこう書いた。「私たちの体験した国民生活の歩みを、政治、外交、経済の動きと関連させて、とらえようとしたものである。とりわけ執筆者が関心をそそいだのは、なぜ私たち国民が戦争にまきこまれ、おしながされたのか、なぜ国民の力でこれをふせぐことができなかったのか、という点にあった。かつて国民の力がやぶれざるをえなかった条件、これが現在とどれだけ異っているかをあきらかにすることは、平和と民主主義をめざす努力に、ほんとうの方向と自信とをあたえることになるだろう。」――新版執筆の目的もここにある。

四年前、初版を世に送ったとき、意外に多くの読者をえた。そしてたくさんの感想を送っていただき、また研究者、評論家の批判をうけた。著者が学びかつはげましを受けたことは大きかった。あつく御礼申し上げたい。

新版は、初版をほとんど書きあらためた。しかし政治、経済、文化の諸分野の動きを統一的につかもうとしたこと、戦争をおしすすめた力とこれに抵抗する力との対抗に視点をすえたこと、このような歴史を見る根本の立場はかわらない。この立場が、歴史の真実を見出すために必要だと考えているからである。

改訂の重点は次の点にある。第一は昭和の歴史を理解する前提として、第一次大戦から筆をおこしたことである。戦争がなぜ起ったのか、国民の力がなぜ勝利しなかったのか、この問題をとくためには、どうしても、大正の時期の国際的条件、国内的条件をつきとめなければならないからである。第二は、本書が読書会のテキストに用いられていることが多いのにかんがみて、できるだけ史実を多く紹介することにつとめたことである。そしてまたこのことによって支配層内のさまざまな動きを、いっそう明らかにしようとした。政治といわれるものの実体を理解することの必要を痛感しているからである。

現代史の叙述はむずかしい。私たちは、今後とも、より良いものとするために精進をつづけたいと念願している。初版にもまして、読者の方々のきびしい批判と教示とをいただきたい。

一九五九年八月

著者

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

I 第一次大戦後の日本……一
1 最初の世界戦争……三
現代の出発点——戦争と革命の時代——二十一ヵ条要求と米騒動——ヴェルサイユ講和会議——三・一事件と五・四運動
2 大正デモクラシー……三
民主主義の発展——原内閣と普選運動——ワシントン会議——労働運動と社会主義者——護憲三派内閣——階級闘争の新局面——無産政党の分立——知識人の動向
II 政党政治の危機……二九
1 金融恐慌……三
幣原外交と中国革命——金融恐慌の勃発——若槻内閣の倒壊

2 山東出兵……三八
第一次出兵と東方会議——恐慌下の労農運動——第一回普選と三・一五事件——第二次山東出兵——張作霖の爆殺
3 田中内閣から浜口内閣へ……四七
治安維持法の改悪——田中外交の破綻——満州某重大事件——浜口内閣と金解禁——ロンドン会議
4 大恐慌の渦中に……五七
世界恐慌——日本の恐慌——農村の惨状——革命運動の挫折——ゆらぐ植民地支配——満蒙問題
III 満州事変……七三
1 侵略の開始……七五
三月事件——事変の発端——関東軍と政府——十月事件——犬養内閣と金輸出再禁止——上海事変と「満州国」——満州事変の意義
2 五・一五事件……八七
新聞雑誌の役割——軍国主義への動き——血盟団事件と五・一五——社会

民主主義者の戦争支持——三二年テーゼ
3 国防国家への道……九七
国際連盟脱退——高橋財政——農村更生運動——官僚の擡頭——言論弾圧と滝川事件——転向と知識人
4 二・二六事件……一二
満州の実情——「一九三五、三六年の危機」——天皇機関説問題——統制派と皇道派——華北侵略の開始——反乱の勃発——「蹶起部隊」から「反乱軍」へ——日本ファシズムの特色
IV 日中戦争……一三
1 準戦時体制……一三
粛軍と軍部の制覇——国防国家の建設——日独伊防共協定と西安事件——林内閣と日本の人民戦線運動
2 日中戦争の開始……一四六
事件前夜の内外情勢——蘆溝橋事件——戦局の拡大——近衛内閣の改造と武漢占領

3 「国家総動員」……一五八
戦争体制の進展——国家総動員法の制定——経済統制の矛盾——言論統制の強化——抵抗組織の解体——三国同盟問題とノモンハン事件
4 近衛新体制……一七一
第二次大戦の勃発——斎藤演説の背後のもの——近衛の再登場——南方進出策と三国同盟の締結——大政翼賛会——新体制運動の意義
V 太平洋戦争……一八七
1 太平洋戦争の前夜……一八九
武力南進——日米諒解案と日ソ中立条約——日米交渉——独ソ戦と関特演——南部仏印進駐——東条内閣の成立——開戦へ
2 緒戦の勝利……二〇六
初期の進攻作戦——開戦と国民——東条独裁の成立
3 戦争体制の危機……二二三
戦局の転換——大東亜共栄圏の崩壊——戦争経済の行きづまり——戦時下の国民生活

4 ポツダム宣言の受諾……二三七
東条内閣の倒壊——戦線の崩壊——一億玉砕——ポツダム宣言——降伏

VI 戦後の世界と日本……二四三

1 第二次大戦の結果……二四五
甚大な戦禍——戦争終結の特色——大戦の性格と戦後処理——アメリカの対日占領政策——皇族内閣の役割——民主化の指令

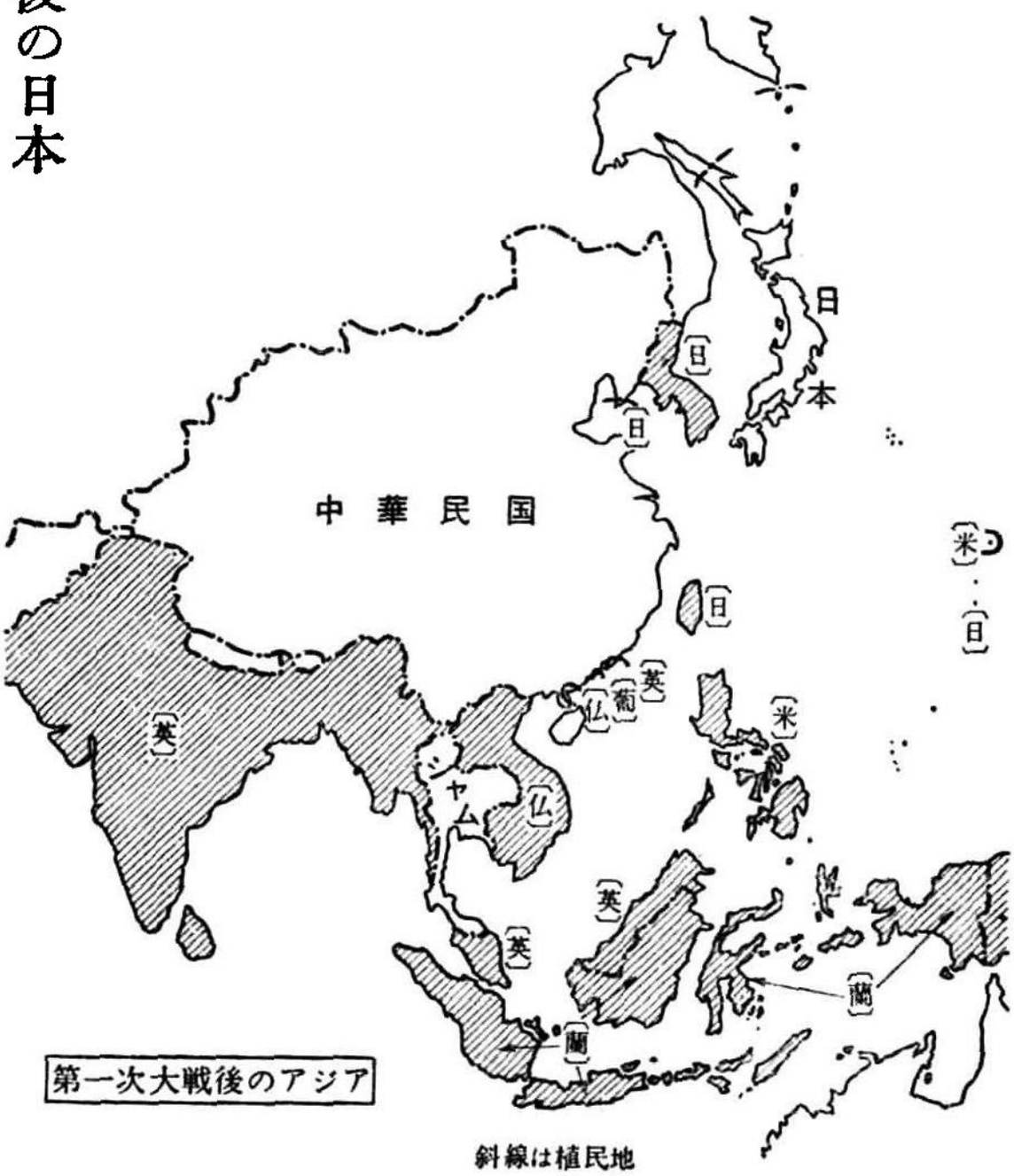
2 戦後の民主化……二五六
国民のめざめ——内閣空白期——財閥解体と農地改革——憲法改正——冷い戦争と中道内閣

3 二つの世界と日本……二七〇
新中国の成立——ドッジ・ライン——朝鮮戦争——サンフランシスコ条約——平和運動の発展——鳩山内閣と日ソ復交——現在の問題

参考文献……二九五
年表……三〇五
索引

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

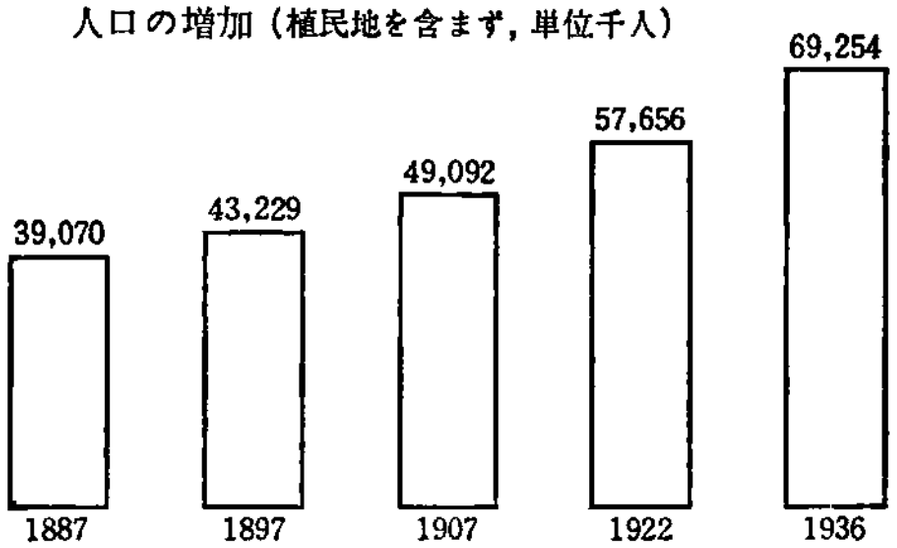
I 第一次大戦後の日本



第一次大戦後のアジア

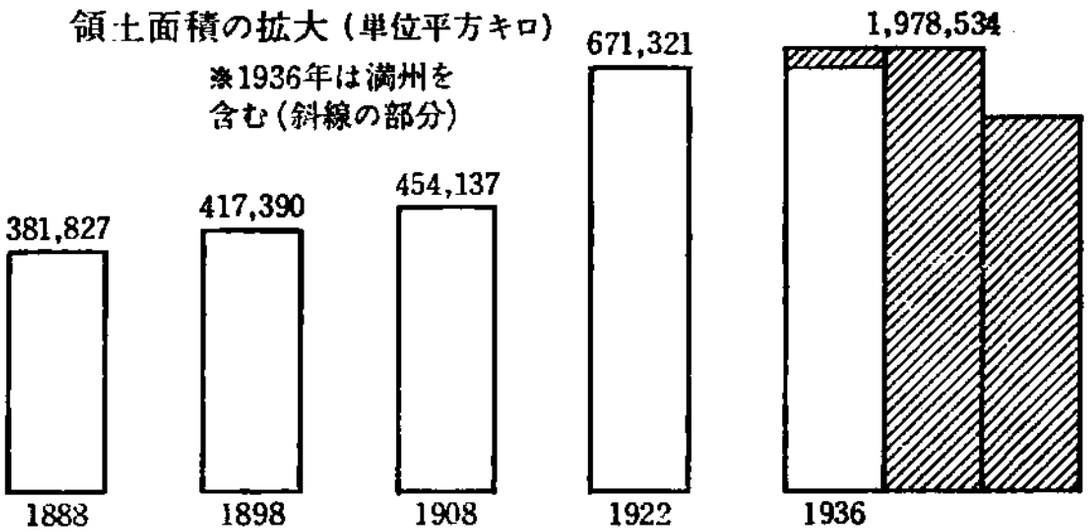
斜線は植民地

人口の増加（植民地を含まず，単位千人）

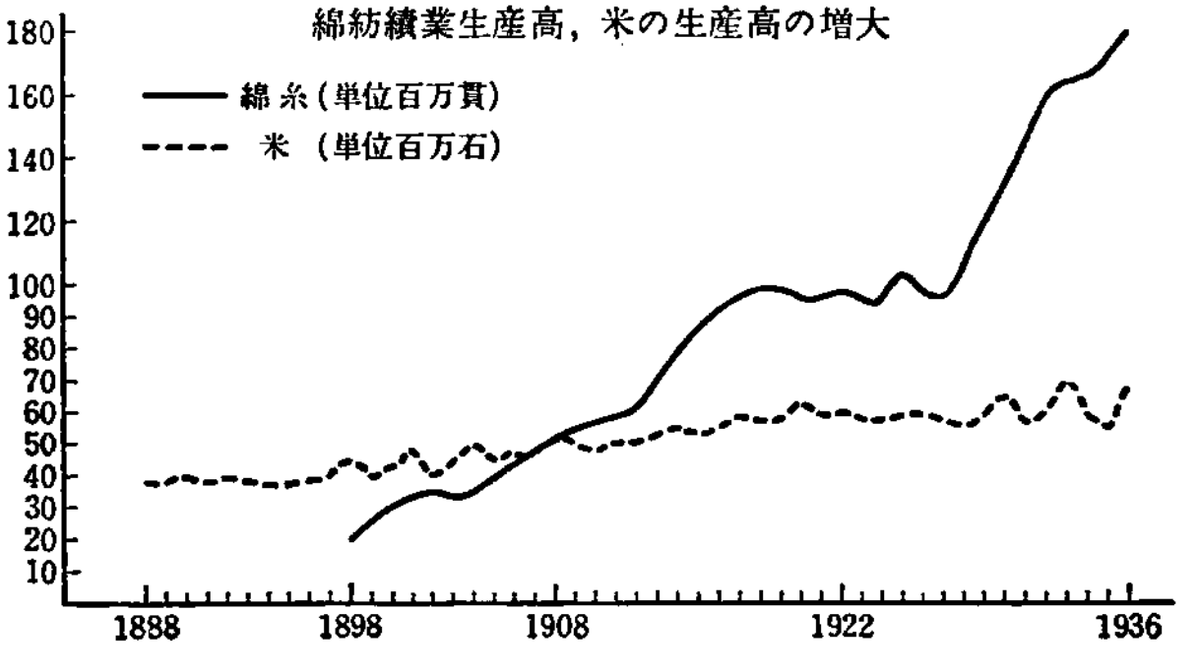


領土面積の拡大（単位平方キロ）

※1936年は満州を含む（斜線の部分）



綿紡績業生産高，米の生産高の増大



1　最初の世界戦争

現代の出発点

一九二六(大正十五)年十二月二十五日、大正天皇が亡くなると、摂政の地位にあった皇太子裕仁がただちに皇位につき、「昭和」と改元した。ながく脳を病んで実際には国政にたずさわることのなかった大正天皇に代って、若い新帝の治世がはじまったことに、支配者たちは「昭和中興、万機一新」の期待を寄せていた。

あたかもこのころ、近代日本の歴史は、大きな転換点にさしかかっていた。一八五八(安政五)年の開国から七〇年、日本の発展はめざましく、第一次大戦ののちには、世界の強国のひとつとして自他ともに許すまでになっていた。

これまでの日本は、欧米列強の中国侵略に便乗し、その相互対立を利用して、アジアの唯一の帝国主義国となる道を歩んできた。だが大戦後は、今まで支持を受けていた英米両国と政治的にも経済的にも対立しあうようになったし、一方、侵略の舞台であった中国での民族解放運動が発展することによって、軍事的な膨脹政策の前には大きな障碍が立ちふさがってきた。

また国内においては、官僚・軍部は、資本家・地主の支配階級とむすんで、国民の政治的自由を制限し、経済的にもきびしい搾取を行って、ひたすら富国強兵への道を突きすすんできた。ところが大戦後になると、国民大衆の民主主義的な要求がたかまり、こうした政治・経済のあり方

もなんらかの転換にせまられていた。

支配者や国民大衆が、こうした課題をどのように解決するかに、その後の日本の運命がかかっていたといえる。しかもこれらの課題は、世界の資本主義諸国の国民がぶつかっていた問題と密接な関連をもっていた。この時期には、世界の動きが直接日本につよい影響をおよぼす反面、日本も世界政治に少からぬ圧力をあたえるだけの国際的地位を獲得していた。それだけに、この転換期の課題は、日本の支配者また国民大衆が、単独に切りぬけることは容易ではなかった。国際的条件の制約を強くうけなければならなかったからである。

ところで、これらの課題は、その源を一九一四(大正三)年から一八(大正七)年までつづいた第一次世界大戦から発していた。だから、わたくしたちが昭和の歴史を理解するには、その前提としてこの時期から出発する必要がある。

戦争と革命の時代

一九一四年六月バルカン半島のサラエボで、オーストリア皇太子は、セルビアの一青年の手で撃たれた。この一発の銃声が、三六ヵ国をまきこむ世界戦争の導火線となった。

すでに二十世紀の初頭以来、帝国主義的対立が年をおってはげしくなる傾向があらわれていたとはいえ、この事件がたちまち全世界をまきこむほどの大戦争となることを、何人が察知したであろうか。

レーニンは、大戦の真最中一九一六年の春に、この戦争の性格を明らかにしようとして、『帝

国主義論』を書いた。それは世界の再分割のための帝国主義戦争がおこる理由を、経済的土台の分析をとおして、はっきりさせようとするものであった。資本主義国は、独占資本主義の段階にはいると、商品販売市場と原料供給地のみならず、資本の投下地域をも求めて、植民地ないしは勢力圏の拡大をますますはげしくきそうようになる。そして二十世紀のはじめには、世界の分割をほぼ終えた帝国主義諸国が、さらにその再分割を求めて争い、その対立の爆発がこの第一次大戦になったのだと論じた。

戦争の規模が未曾有にひろがったというばかりではなかった。兵器の発達のため、人命と物資の、おどろくばかりの消耗戦となった。四年間の戦争を通じて、戦死者九〇〇万、戦傷者二二〇〇万、その他に非戦闘員一千万人が死んだ。非戦闘員の犠牲が大きかったのは、第一次大戦の特色であった。潜水艦の商船襲撃や、戦争の末期にあらわれた飛行機、飛行船の空襲が、この災害を増大させた。

「総力戦」(total war)という考えは、このころ、ドイツの作戦家として名高いルーデンドルフが唱えた。交戦国は、長期にわたる消耗戦にたえるためには、国民総力の一切を軍需品の生産と前線への「人的資源」の供給にそそがなければならなかった。各国ともに、経済統制、国民生活統制に手をつけたのは、「銃後」が勝敗をきめる重要な要素となってきたからであった。各国の政府は自国民の国家意識をあおりたてて、敵国にたいする民族的なにくしみをかきたてる宣伝活動に力を入れ、他方、相手国国民には、士気を沮喪させ、敗戦意識におとしいれるような「心理戦」

をいどんだ。

このような総力戦的な性格は、人命・物資の多くの犠牲を強いられた民衆の不満と反抗とを蓄積させ、いったん国家による統制がくずれたときには、革命への動きをひきおこさざるをえなかった。戦争が革命を生みおとすこと、これまた第一次大戦のもった特色であった。革命への動きは、とくにロシアと敗戦国であったドイツ、オーストリアに顕著であった。

開戦三年後の一九一七(大正六)年十一月、ロシアに社会主義革命がおこった。ロシアでは巨額の外国資本が輸入されて独占資本が成立し、社会民主党の指導によって労働運動が強く、その反面、少数の大地主が広大な土地を独占し、さらに大ロシア民族以外の「諸民族の牢獄」といわれた民族的抑圧があり、それらの諸矛盾の上に、ツァーの専制権力がそびえたっていた。こうして帝国主義の矛盾が集中していただけに、戦争の苦難がいちじるしくなると、革命運動はもっとも早くおこされ、もっともはげしいものとなった。

一七年三月、軍隊が労働者のストライキと婦人の食料品店にたいするデモを鎮圧する命令を拒否すると、ツァー政権は自壊した。労働者・農民および兵士は各地に協議会(ソヴェト)をつくった。そして、レーニンの指導するボルシェヴィキ(社会民主党の多数派、一八年ロシア共産党と改称)は、民衆に平和を、農民に土地を、少数民族には自治を約束して、ソヴェトの支持をえ、十一月には、世界最初の社会主義政権をうちたてた。

ソヴェト政権はただちに無併合・無賠償・民族自決の原則にもとづく即時講和を各国に提議し

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com